

Preverb *ge-* の意味構造⁽¹⁾

——意義素的考察——

丹 羽 義 信

1. 意義素について筆者が始めて知ったのは、10数年も前のこと1953年の言語研究 22, 23 号にのった服部先生の「意味に関する一考察」によってである。先生は其中で意味も社会習慣的に繰返しあらわれるものであること、即ち音声に対し音素が存在するように、意味に対し意義素が存在することを述べられた。それは言語単位における三つの抽象的段階に相当する段階が意味の面でも考えられ、具体的段階である発話、第一次抽象的段階の文、第二次抽象的段階の形式に対して、夫々「意味」「意義」「意義素」と名づけられる意味の段階が存在するというものである。更に、意義素は単語又は、より小さい形式の意味のため、決定には文脈の影響を注意深く取除き、隣接する諸単語の辞書的意味の混じり易いことに留意すべきことを警告している。要は、意味の記述においても、抽象的な段階を仮定することが肝要であるということである。

ここで取扱う Preverb は単語よりも更に小さな段階、服部先生が記号素と呼んで居られる形式であって、その意味の記述には、特に、隣接する単語の辞書的意味の干渉を受け易いものである。例えば、*ge-* が完了の意味を持っていると一般に記述されている場合に、よく調べてみると、*ge-* がその意味を示しているのではなく、*ge-* の接する動詞語幹の意味であったというが如くである。一般に Preverb の一形式に対し、多数の意味を認めようとするが、意義素的考察においてそのようなことはあり得ないのであって、これは動詞語幹の意味が混入していることが考えられる。一般に Preverb は語義の意味を失っていることが多いため、意味の認定が困難なことが多い。これらの理由で、筆者は

意義素の理論と方法が、Preverb の意味の研究に、最も適したものと思っている。

筆者は第八回中部英文学会において「OE Preverb *ge-* の意味について」なる研究を発表し、意義素について言及したが、それは、臨時的意味の除去のみに重点を置いたもので、意義素の構造に関し不明な点を多く残した。最近服部先生の「意義素の構造と機能」言語研究45号(1964)が発表されて、或程度解決の手がかりをうることができたし、更に、先回の発表では資料の共時性に問題があったなどの理由で、ここに再び *ge-* の意義素について考察した次第である。しかし尚方法論において不明な点が多く、且資料においても限られた量のため不完全なものであることをつけ加えなければならない。

2. Preverb とは *ge-*, *a-*, *be-*, *for-* etc. の如く、動詞と固く結合した Preposition 又は Adverb をさすものである。これらは、全体的に研究さるべきものであるが、ここでは *ge-* を中心として行いたいと思う。というのは、*ge-* はもっとも広い意味、或は変化のある意味を示していて、意義素の分析としての価値が大きいと思われるからである。

Preverb は、動詞副詞結合の一種である故に、ここで述べる意義素的分析は、多少の修正を加えれば、現代の動詞副詞結合にも適用できるものと考えている。

3. ゲルマン語における Preverb 就中 *ga-* の意味に関しては、周知の如く Streitberg の *Ga-theory* がある⁽²⁾。Streitberg は *ga-* がスラブ語の *vid* と同じような Aspect を示すことを指摘した。それによれば、Simple Verb は durative aspect, 即ち、無限につづく動作の始めとか終りを考えない動作を示し、これに対し、Compound Verb は perfective aspect 即ち、動詞の本来持っている意味に完了の副概念の加った動作、時には動作の出発点とか完了の瞬間の動作を示すものであって、Preverb の中、Gothic の *ga-*, OE の *ge-*, OHG の *gi-* がその機能を果す文法的形式であるとした。その後この説は多くの学者によって否定されたが、その一人に Lindemann がある。彼は *Old English Preverbal Ge- : A Re-examination of Some Current Doctrines* (JEGP

64, 1965, p. 82) において *ge-* は Aspect を表わすのではなく, Aspect とは別の Aktionsart と呼ぶべきものを表わすとした。彼によれば, Aktionsart は文法的カテゴリーではなく, 語義的のものであり, objective なものである。そして, *ge-* のあらわす Aktionsart は terminative Aktionsart であるとした。此の説は *ge-* のあらわす意味に対し, 語義の意味と文法的意味を区別した点において注目すべきであるが, *ge-* の語義の意味を指摘することができないことや⁽³⁾, 語義の意味をよく留めている他の Preverb, 例えば *a-*, *be-*, *for-* etc. と *ge-* との相違を説明できないなどの欠点をもつ。frequency からみても, *ge-* と他の Preverb とに機能上大きな相違があったのではなからうか。つまりこの説は *ge-* に多少なりとも文法的な性格があるという点を全く説明できないと思う。

次にアメリカの学者 P. Sherer も Aspect を否定する 1 人であるが, 彼の主張する *ga-* の機能は, The Theory of the Function of the Gothic Preverb *ga-* (Word, 20. 222-245) にみられるものである。それに示されているものは, 二つの異った用法からなるもので, それらは, A. 語義的な意味の区別を与えるもの, B. tense の相異を与える syntactic use である。これは Gothic の場合であるが, 排他的な 2 用法を認める点は⁽⁴⁾ OE の場合でも同様であろうと思われる。これに対し私の疑問は, 語義的な意味の場合でも *rinnan* 'run' に対し *garinnan* 'obtain'⁽⁵⁾ といったものが含まれて居り, 完了の意味と無関係ではないし, B. の tense の相異は認めるとしても, 完了的な意味も又 Streitberg の主張の如く認められるわけである。そうすれば, A. B. の間に或る共通する意味の要素も存在するのではなからうか。この主張は, この共通性を全く説明することができない。

4. 資料。The Anglo-Saxon Chronicle, Parker MS 1-891 の部分を資料とした。最近 A. Shannon⁽⁶⁾ が, Early West Saxon の共時的研究の資料として最も適しているといっている部分を含んでいる。

5. さてこの資料にあらわれる *ge-* の意味は, 次の如くである。

主要動詞における ge- : $ge-$ の意味と頻度
(Saxon Chr. A 1-891)⁽⁷⁾

A.

- | | | | |
|---|--------------|-----------------------------------|----------------------|
| ① | <i>hatan</i> | 'order': 'promise' ⁽⁸⁾ | 7 : 2 ⁽⁹⁾ |
| ② | <i>dælan</i> | 'divide': 'share' | 1 : 3 |

B.

- | | | | |
|---|---------------|--------------------|--------|
| ③ | <i>gan</i> | 'go': 'conquer' | 15 : 7 |
| ④ | <i>læstan</i> | 'follow': 'fulfil' | 1 : 1 |
| ⑤ | <i>winnan</i> | 'fight': 'gain' | 5 : 1 |
| | | : 'fight'* | : 1 |
| ⑥ | <i>ridan</i> | 'ride': 'conquer' | 6 : 2 |

C.

- | | | | |
|---|---------------|-------------------------------|--------|
| ⑦ | <i>faran</i> | 'go': 'die' | 33 : 9 |
| | | : 'depart'(?) ⁽¹⁰⁾ | : 1 |
| ⑧ | <i>syllan</i> | 'give': 'give up' | 8 : 2 |
| | | : 'give' | : 4 |
| ⑨ | <i>don</i> | 'do': 'reduce' | 4 : 1 |
| | | : 'do'* | : 1 |

D.

- | | | | |
|---|---------------|-------------------------------------|--------|
| ⑩ | <i>biddan</i> | 'ask': 'pray' | 4 : 1 |
| ⑪ | <i>fon</i> | 'take': 'seize' | 74 : 3 |
| ⑫ | <i>metan</i> | 'meet': 'oppose'(?) ⁽¹¹⁾ | 6 : 1 |

E.

- | | | | |
|---|----------------|---------------------|------------------------|
| ⑬ | <i>niman</i> | 'take': 'take'* | 27 : 1 ⁽¹²⁾ |
| | | 'seize': 'seize'* | 1 : 6 |
| ⑭ | <i>weorðan</i> | 'happen': 'happen'* | 3 : 1 |
| ⑮ | <i>healdan</i> | 'hold': 'hold'* | 44 : 1 |
| ⑯ | <i>lædan</i> | 'lead': 'lead'* | 8 : 1 |
| ⑰ | <i>slean</i> | 'kill': 'kill'* | 3 : 4 |
| ⑱ | <i>beodan</i> | 'offer': 'offer'* | 2 : 2 |

⑮ *hyran* 'hear': 'hear'* 2:1

⑯ *hergian* 'harry': 'harry'* 1:2

F.

⑰ *cyrran* 'turn': 'turn' 2:1

⑱ *timbrian* 'build': 'build' 2:2

⑲ *feohtan* 'fight': 'fight' 24:46

ここに大略分類しただけでも、A-Fの6つの意味がみとめられる。一般に一つの形式は一つの意義素をもつもので、一つの *ge-* が数個の意義素をもつことはありえない。とすればこれらの意味はどのようにまとめられるであろうか。

6. 「意義素の構造と機能」⁽¹³⁾ によれば、自立語の意義素は、文法的特徴、語義的特徴及び文体的特徴からなる。従来単語の意義素といえば、語義的特徴のみをさしたのに対し、文体的特徴までも含めた点注目に価する。Preverbは単語より小さい形式、記号素であるから意義素の構造も異って当然である⁽¹⁴⁾。一般に記号素は、文法・文体的特徴を主とし、語義的特徴を欠くのが普通である。Preverbは自立語に近い記号素であるから、語義的特徴を留める場合も考えなければならない。他方、単語にはない動詞語幹と結合する文法的特徴——《結合性》⁽¹⁵⁾ と呼ぶ——を多かれ少かれもっている。このように見てゆくと、Preverbの意義素は構造として、語義的特徴、結合性を含む文法的特徴、文体的特徴が考えられるが、記号素の本質として、語義的特徴を欠くか、弱めていることが予想される。

さてこれらの諸特徴はどのようにして客観的に観察できるか。意義素の方法論は、諸特徴は、文脈に照応する事が多いので、文脈的機能を調べる事を教えている。事実本稿でも文体的特徴などの記述には、この方法はきわめて有効であることを示した。

7. さて5. にあげた *ge-* の意味分布によってこれらの諸特徴がどのように「目立っている」⁽¹⁶⁾ かを先ず観察し、次に各特徴相互の関係について考えてみよう。

最初に A ①② では ‘order’ ‘divide’ が、夫々 ‘promise’ ‘share’ となっている。‘promise’ ‘share’ には *ge-* の本来の意味、‘together’ が含まれているが、同時に、B と同じ動詞語幹の表わす意味の「達成」の意味も含まれている⁽¹⁷⁾。更に後者には結合性による意味の比喩化がみられる。故にこの *ge-* の意義素は少くとも、語義的特徴、語義文法的特徴⁽¹⁸⁾ 更に《結合性》の文法的特徴が目立っていると考えられる。

B では ‘conquer’ ‘fulfil’ ‘gain’ と夫々「達成」を示し、C では ‘go’ に対しては ‘die’, ‘give’ に対しては ‘give up’ の如く、動詞語幹の意味の「結果」の意味を示し、D では ‘ask’ に対し ‘pray’, ‘take’ に対し ‘seize’ の如く動詞語幹の意味の「強調」の意味を示している。これらの意味の相互関係は別として、*ge-* の意義素の構造は、A の場合と同じことがいえると思う。唯、lexico-grammatical feature といっても lexical feature と grammatical feature の割合は一定ではなく、A では前者がより目立ち、D では、後者がより目立っているといえよう。

次に E では ‘hold’ に対し ‘hold’ の如く、lexical feature も grammatical feature も目立っていない。しかし、「文脈的機能」の研究によって、動詞語幹の意味を強調している強調表現であることがわかった。この機能は、*ge-* の意義素に文体的特徴のあることを示している。従って、この *ge-* の意義素は、語義的、語義文法的特徴は極く弱くなり、文体的特徴のみが、目立っていると考えられる。

次の F では、*ge-* は、E と同じ意義素の構造を有するか、或は文体的特徴すら極めて弱まっている構造を有するかである。所謂 free variation で、意味がないと感ぜられる。しかし The preverb could not have been reduced to zero semantically.⁽¹⁹⁾ とすれば、意味がないとすることはできない。

8. 諸特徴の相互関係を述べる前に、文体的機能について実例をあげておくこととする。従来これらの *ge-* は nonce word とみなされ、その機能が客観的に示されたことはなかったように思う。次にみるように、副詞、形容詞など

を含む文脈に、*ge-* の文体的機能が相呼応している場合が多いのである。以下、代表的な ⑮ ⑯ ⑰ と、B の ⑤ C の ⑨⁽²⁰⁾ についてみることにする⁽²¹⁾。

1) ⑮ *healdon* 44:1

#- の場合は全く強調の文脈がみられないが唯 1 例の *ge-* の場合には *wuldor-fæstlice* ‘gloriously’ なる副詞があらわれる。

ge- の場合

167 8 18⁽²²⁾ *pone wuldor fæstlice xv winter geheold.* ‘he held it (=the see) gloriously for 15 years.’

#- の場合

660 32 9 *Wine heold biscepdom iii gear.* ‘Wine held the episcopalsee three years.’ 同様に 704 40 20, 703 40 17, 2 17, 167 8 18, 2 11, 2 17, 2 20, 2 12, 2 22, 2 23, 4 2, 4 3, 4 4, 4 5, 4 6, 4 16, 4 17, 4 18, 4 7, 4 9, 565 18 9, 611 22 9, 643 26 14, 670 34 13, 688 40 1, 716 42 7, 716 42 7, 741 44 23, 728 42 31, 731 44 5, 738 44 19, 694 40 14, 754 46 18, 755 50 1, 755 50 3, 755 50 3, 709 40 27, 874 72 34, 887 80 21, 887 80 26, 860 68 1, 716 42 14, 877 74 21

2) ⑯ *lædan* 8:1

唯 1 例の *ge-* の場合には *micle* ‘great’ なる形容詞があらわれ、強調の文脈となっている。

ge- の場合

871 70 15 *pæs ymb iiii niht Æpered cyning ond Ælfred his broþur pær micle fierd to Readingum gelæddon,* ‘four days afterwards king Æthelred and Alfred, his brother, led great levies there to Reading.’

#- の場合

418 10 19 *ond sume mid him on Gallia læddon.* ‘and they took some with them into Gaul.’ 887 80 30, 888 80 32, 890 82 7, 607 22 4

lædde his fœrde to Legercyeestre ‘he led his levies to Chester’, 796 56 9, 827 60 32, 828 62 2.

3) ⑰ *slean* 3 : 4

ge- をとる 4 例では, *wæl* ‘slaughter’ が object としてあらわれ, 強調の文脈となっている。

ge- の場合

851 64 22 *ƿær ƿæt mæste wæl geslogon* ‘there they slaughtered most of them’, 851 64 12, 837 62 29, 845 64 10.

#- の場合

607 22 6 *man sloh eac ·cc· preosta* ‘two hundred priests were also slain’ 746 46 7 *mon slog Selred cyning.* 823 60 19 *ƿy geare slogon* East Engle Beornwulf Miercna cyning, ‘the same year the East Angles slew Beornwulf, king of the Mercians.’

4) ⑤ *winnan* 5 : 1

ge- をとる 1 例には, *heardlice* ‘resolutely’ なる副詞があらわれ, 強調の文脈となっている。

ge- の場合

741 44 23 *heold xvi winter, ond heardlice gewon wip Æpelbald cyning,* ‘he held 16 years and resolutely made war against king Æthelbald.’

#- の場合

597 20 15 *simle he feaht ond won, oppe wip Angelcyn, oppe uuip Walas,* ‘ever he fought and made war either against the Angeles, or against the Welsh,’ 4 25 *hie wip ƿone here winnende wærun,* ‘they were making war against the host,’ 835 62 17 (現在分詞), 878 76 4 (現在分詞), 685 38 13 (不定詞).

5) ⑨ *don* 4 : 1

ge- をとらない 4 例は結果的強調性が, *ge-* をとる 1 例と比較して明らかにうすい。

ge- をとる場合

8 7 *sepe sæde þæt he þone dæg forlure þe he noht to gode on ne gedyde*, ‘who said that he lost the day when he did nothing good,’

#- をとる場合

853 64 29 *hie him allre gehiersume dydon* ‘they made all obedient to them’ 449 12 10 *hi swa dydan*. ‘they did so,’ 616 22 20 (*swa* をとる), 853 64 26 (*swa* をとる).

9. 前にもどって諸特徴, 及夫々の意味の相互の関係について観察する。A, B, C, D が結合性による比喩的意味を含むことをすでに観察したが, 更に, *ge-* の示すと思われる各意味, A では「相互及び達成」⁽²³⁾, B では「達成」, C では「結果」, D では「強意」の各意味は, 結合する動詞の意味の相違にもとづく具体的(臨時的)意味であることを知る。これらの各意味は, 主に動詞語幹に対し相補い合う分布を示しているし⁽²⁴⁾, 又各意味は類似性を持っている事を認めることができる。B, C の「達成」と「結果」から D の「強意」が出てくるのは, 動詞語幹の相いによって説明される。即ち, B, C では, 動詞語幹に「達成」「結果」の意味は含まれていないのに対し, D では含まれていると考える。従って *ge-* は D においては単に「達成, 結果の強意」を持つにすぎないのである⁽²⁵⁾。このようにして, A, B, C, D の各意味は, 動詞語幹の意味によって説明されるものである。しかし乍ら, *Ge-compound* の意味が, Simple Verb から全く自動的に作り出し得ないのは, 結合性による比喩的意味が加っているからである。例えば, ‘go’ から自動的に ‘die’ の意味を作り出すことはできない。結論として, A, B, C, D の意義素の構造は, <結合生> という文法的特徴と, 動詞の意味に <完了の副概念をそえる> lexico-grammatical feature が目立ち, A では更にそれに <together> の語義的特徴が

みとめられるとなる。

E, (F) では《結合性》による意味の比喩化はみられず、文体的特徴——《強調的表現》としておこう——が目立っている。ところで、この E, (F) は A, B, C, D とどのような共通性、或は関係をもつものであろうか。

E, (F) では文体的特徴が目立っているが、lexico-grammatical feature の《完了性》も全く失われているわけではなく、それらは弱まって、文体的特徴の《強調的表現》と密接に結びついていると考えられる⁽²⁶⁾。即ち《完了性》の特徴は共有するものであるが、一方では極度に弱まったため、文体的特徴が目立っていると考える。この事は種々の面で裏づけることができる。第1に、この文体的特徴を示す例の中には、《完了性》を或程度留め、移向段階を示しているものがある。例えば、E. ⑬ *niman* は注(12)に述べた如く、D>E への移向をよく示しているし、又 ⑮ *winnan* の用例をみると (p. 164) #- の場合には現在分詞など継続を表わしていることが多い点からして、*ge-* の意義素には《完了性》が残っていると思われる。第2に、A, B, C, D と E, F とは、主として動詞語幹に対し、相補分布をなす。これは、少くとも *ge-* の意義素の一部が共通していることを示す⁽²⁷⁾。つまり E, F における《完了性》の弱まりは動詞語幹の意味によって説明されうるのである。これは歴史的にみてもいえることで、*ge-* は自らの意味を動詞語幹に奪われることによって、新しい意味を獲得している。一般に B, C, D と E, F が全く別種のもものと感ぜられているのは、《結合性》における相違と、文体的特徴の有無⁽²⁸⁾ によるといえよう。他方、意義素の或る特徴が共通しているという事実は、A-F の *ge-* が意味はちがうが、同じ一つの *ge-* であるという intuition を説明するものである。

10. *ge-* は語義的から文体論的にわたる諸特徴を意義素の中にもっているが、個々の場合にはいずれか一つの特徴が目立って出てくる。更に一つの言語では、諸特徴が等しく目立つということはなく、いずれか一つが、優勢を占めているようである。この事は、*ge-* の意味の通時的研究によき足場を与えるよ

うに思われる。さて吾々の資料について、どの特徴が目立っているかについてふれてみよう。

先ず A にみられる語義的特徴の目立つ場合は、ごく少ない。次の語義文法的特徴と文体的特徴の目立つ場合は半々を示しているが、後者がより優勢であるかも知れない。それは、⑤ *winnan* ⑧ *syllan* ⑨ *don*⁽²⁹⁾ の場合に示されている。これらは、B と E, C と F, C と E の如く、2つの特徴が目立つ意味をもっている。例えば、*ge-winnan* は、‘gain’ (B) と ‘fight’ (E) をもっている。これに対する解決は、‘fight’ <完了>と ‘fight’ <未完了>を夫々持つ2つの Simple Verb を仮定するか、⑬ *niman* における如く、‘gain’ なる意味がすでに Simple Verb に移向しているが、資料の不足から記述できなかったと仮定するかである⁽³⁰⁾。後者の可能性は大いにあり、Plummer の text で、隣接部分を調べると、*winnan*, *syllan* 共に *ge-* なしで、夫々 ‘gain’, ‘give up’ の意味をかく得していることがわかる。そのようにして A, B, C, D に属する更にいくつかの *ge-* は、十分な資料がえられれば、文体的特徴の目立つ *ge-* と解釈でき、この *ge-* は増加することになる。

11. 以上の用例に、過去分詞にあらわれる *ge-* は全く含まれていないので、それについてふれてみよう。過去分詞には、他の Preverb があらわれる場合と、*nemmed* ‘named’ の場合 (477 14 8, 794 56 6, 508 14 25) とを除いて *ge-* は常にあらわれている。これについてどのように考えるべきか。吾々は先ず「強調」の機能をみとめることができる。*ge-* が過去分詞の marker のようにいわれているが、必ずしもそうではない。過去分詞は、他の Inflexion⁽³¹⁾でも示されているからである。それより、過去分詞は「完了」の意味を常に含んで居り <強調>の意義素の目立つ *ge-* が現れる条件を含んでいることを注意しなければならない。*ge-* が過去分詞の marker であれば、当然 *ge-* 以外の Preverb がついていても、*ge-* は更に現れなければならないのに、実際は現れないという事は、*ge-* の機能が単なる過去分詞の marker でないことを物語っている。しかし *ge-* は <強調>を示すといっても、文体的機能は認められず、文脈的機

能としては、過去分詞と殆んど 100% 結合することであるから、文法的特徴に近いといえよう。

12. 以上 *ge-* の意義素の構造について、いささか試案を述べてみた。記号素——就中、*ge-* のように自立語に近いもの——の意義構造については、方法的に問題が多く残されて居り、この試案も今後改めてゆきたいと思っている。私の考え方は、*ge-* の意義素に、語義的から文体的に及ぶ特徴を仮定しておいて、個々の場合は、そのいずれかが「目立って」、他が「弱まっている」と考えることによって、種々の *ge-* の同一性と、相異性とを説明せんとしたものである。従来この点について、満足な説明は与えられていない。

Streitberg のように *ge-* はすべて完了態を示すとしただけでは、意味の多様性が示されない。つまり、語義的、文法的、文体的にわたる意味が、混然一体として示されているので、真に構造を明らかにすることができないのみならず、Aspect の如き文法的カテゴリーを不用意に主張する結果となる。他方 Lindemann の如く、Aktionsart として、語義的特徴のみに注意したのでは、他の Preverb との区別ができなくなり、又、所謂意味なき *ge-* との関聯を説明できない。この点は、Sherer も同じで、*ge-* のもつ広い意味における同一性の説明には、成功していない。語義から文体的に及ぶ意味を、同一次元で扱っているところに問題がある。

最後にこの構造は、動詞副詞結合にも、大体あてはめることができる。例えば、eat up では up は語義的特徴が弱まって、いくらか文法的特徴を示し、put out ‘消す’ では out は結合性による比喩的意味を生じている。これら及 *ge-* 以外の Preverb の意味構造については、別の機会にゆずりたいと思う。

注

- (1) 本稿の要約は第20回中部英文学会（昭和42年10月）で発表された。
- (2) Streitberg, 'Perfective und imperfective Aktionsart im Germanischen,' *PBB*, XV (1891), p. 15.
- (3) Aktionsart を示すためには、*ge-* は lexical meaning をもたなければならない。

- a- とか be- とか for- にはそれを見出すことができるが, ge- には容易に見出すことはできない。
- (4) A, B 二つの用法は mutually exclusive であるとする。(Sherer, p.236).
- (5) Sherer, p.228.
- (6) Ann Shannon, *A Descriptive Syntax of the Parker Manuscript of the Anglo-Saxon Chronicle from 734 to 891* (Mouton, 1964).
- (7) # と ge- の両用例をもつ動詞を含む。# は ge- のない場合を示す。
- (8) 最初が #, 次が ge- のついた時の意味を示す。
- (9) 最初が #, 次が ge- の場合の頻度を示す。夫々の用例及其他全動詞の list は手許に整理されてあるが, ここでは紙面の都合上省略する。又過去分詞の用例は含まれていない。* は文体的意義区別の確認できるもの。
- (10) この訳は 'go' ても訳される。
- (11) この訳は 'meet' とも訳される。その場合は, E 又は F のグループに入る。
- (12) niman は D から E に移った様子を残している。'take' の時は, # が多く, 'seize' の時は ge- が多い点である。
- (13) 服部, 言語研究 No.45, p.13.
- (14) 記号素の場合は, 意義素, …特徴という名称を, 使うことは, 厳密には, 正しくないかも知れないが, 本稿では, 自立語と同じような取扱い方をした。又意義素でないものは, すべて意味と呼んだ。
- (15) <> は意義素を示す。
- (16) ge- の意義素にはいくつかの特徴があって, その中一つが「目立っている」と考える。
- (17) Lindemann (p.82) は 'together' と「達成」の意味はとても結びつかないという。筆者によれば, ge- は語義的特徴として 'together' をもち, 同時に, lexico-grammatical feature として「達成」をもっていると解釈できると思う。しかもこの2つの特徴はいずれかが主になって, 他はおとろえる傾向を ge- の歴史は示している。Lindemann は語義的特徴として, 2つの意味を結びつけようとしているため, 結びつかないと思われる。
- (18) 「達成」の如き, 語義的と文法的との中間の特徴を語義文法的特徴 (lexico-grammatical feature) と呼ぶ。
- (19) Lindemann p. 82.
- (20) これらは, B, C の意味と E の意味とを両方もっているので B, C のグループに入れておいたが, 二つの意味の相互関係の考察の後, 再配分されるべきものである。

- (21) 以下の用例は当然のこと乍ら *exhaustive* である。
- (22) 最初から *Annal*, 頁, 行を示す。Text は *Plummer, Two of the Saxon Chronicles*, vol. I (1952, Oxford), 但し *Annal* のない時は頁, 行のみを示す。
- (23) 各具体的意味は簡単にこのように呼ぶ。
- (24) 稀に, 同一語幹に2つの意味があらわれることがある。例えば *winnan* には C と E があらわれる。
- (25) ここで, 「強意」の意味があらわれるのは, *ge-* の意義素の中の文法的 (文体的) 特徴が目立ってきているのかも知れない。
- (26) これは, *lexico-grammatical feature* が, 文体的特徴にかわったという意味ではない。
- (27) 特徴を異にしているから, 全部が共通しているとは考えられない。
- (28) 厳密には, 程度の差即ち「目立っている」か否かによる。
- (29) ⑨ *don* では, 他の資料でも *ge-don* 'reach' の如き用例があり, 'reduce', 'reach' etc. の意味を *Simple Verb* に求めることは無理のようである。
- (30) 注 12 *niman* では文体的特徴の目立つ *ge-* が 'seize' の意味をもつ *niman* にあられ, 更に, 'take' の意味をもつ *niman* にもあらわれている。古くは, 前者は存在しなくて, 'seize' の意味は *ge-niman* のみに存在したであろう。その時には, *ge-* は D. ⑩ *fon* と同じ意味構造をもっていたであろう。
- (31) 強変化, 弱変化の活用をさす。